

幼稚園の細目

馬場 定一 譯

幼稚園の細目に關する事は今日迄に可成繰返された問題であつて、其の間に各種の細目が作られもし又改められもした。「母の遊嬉」に據つたもの、幼児直接の興味を基としたもの、共同生活の中に於て子供が其の動機を見出し得る様な種類の細目、又は自然界より靈感を獲る事の出来る様な細目等が其の主なるものであつて、其の形式は或る經驗に富んだ保姆が之を編成して之を一般に實施せしめるといふ共通の細目の主張せられた事もあり、又之を否定して各細目は之を實施する所の保姆の創意に由りて作製せられねばならぬ事を主張するものもあつた。

細目作製の初期に於ては、恐らく今日に於ても或る程度迄は、其の編成は多少論理的にして且つ形式的になり易い事は眞理である。そして主として智的方面から發達したものであつて、子供等が親しまねばならぬと信せられる様な題目を提供し、之を順序立て、配列したもので、従つて外部よりあてがはれ

た從屬的事柄を而もあまり多く聚め過ぎる傾があつた。而して保姆殊に若い保姆は其の題材が子供等に作用したかどうかは考へないで、只其の廣い列に互つて排列せられた題目の總てを子供に授けねばならぬものだとこの誤信の下に働いて居たのである。畢竟保姆は、自分が該博な知識を持つて居なければならぬ理由は、之を子供等に分與する爲では無くして、子供の要求に間違無く應じ得る様之を照す所の手段に過ぎないのだと云ふ事を知らなかつたのである。

細目の進化するには題材の根本變化に由るものと教育過程を支配する主義の認識に由るものと二つの場合があると思ふが、後者の場合に於ける進化は、前者の場合に於けるものに比すれば一層大なるものがあると思ふ。而して吾々は教育に於ては、相互相離るべからざる關係を有する所の心理學的局面と社會學的局面とのある事を知るものであつて、從て教

育手段とは未熟にして未だ發達して居ない個人(心理學的要素)と成人の熟したる經驗に於て體現せる或る特定の社會的目的、意味及價值(社會學的要素)との間の相互關係の一端であるを定義せらるゝものである。

此の事に由りて自然吾々は、未だ發達して居ない子供と、社會全體の成熟したる生活及其の相互補助の關係との二つの要素の研究に導かれるのである。

其の結果小さい子供の天性や其の經驗の特徴及人生に對する子供の態度の或るものを知る事が出來た、即ち子供は未だ理性の力を所有して居ないので主として愛情や同情等の感情的行爲に由りて導かるゝ所の感動的の動物である事、彼の活動せる世界は自分の經驗によりて限られたる狭き而して個人的の世界である事及彼の經驗は吾々には何等關係のない離れ離れの物の様ではあるが、子供にとりては統一せられたる者である事を認むる事が出來たのである。そこで吾々は、子供は唯感情に由りて導かれて居るのみで未だ判斷力を持つて居ないが、彼を取り巻く人生の研究には鋭き興味を以て滿されて居るものであつて、而も彼等を壓服する所の大衆の世界―其

の世界は子供にも働き子供も又之に反應する所の―につき出されて居るものである事を知るのである。而して其の相互作用は子供の生活の初期に其の端緒を有し且生存中絶えず其の作用を増すものである。

却て保姆が幼児を受取つて第一に考に浮ぶべき事は「幼児をして都合よく相互作用を行はせんが爲には幼児を取巻く人生の多くの局面中より如何なる手段を選ばねばならぬか」である。所が社會全體としての成熟したる人生は―それには子供がどうにかして適應して行かねばならぬものであるが、時に「種族の同化して行かねばならぬものであるが、時に「種族の靈的遺傳」と呼ばるゝものに由りて尠からず形付けられ又制限せられて居るものであるから、右の問題は「此の種族遺傳から子供自身に最善のものを得しめんが爲に及最後には其の世界の進展擴大に對しては子供自身も貢獻し得んが爲に、子供の生活せる世界に適應せしむる様之を誘導して行くには如何なる手段を執るべきであるか」と言ひ換へる事が出來る。而して幼稚園は此の必要なる適應に於て僅かに其の小さき端緒を與へ得るに過ぎないものだと考へる必要は無いことゝ確信する。

所謂種族の「靈的遺傳」又は「靈的所有」と稱するものは何を意味するものであるか。之疑も無く文明の發展進歩に貢獻し且つ世々其の永遠の價値を其自身に證據立てゝ來た所の色々な手段を意味するものである。この事より吾々は直ちに高尚なる宗教的理想に由りて動かされたる貴き人々を作りそして正義と眞理とを其の主義として立てる國家並國民の發達に貢獻したる彼の偉大なる道德及宗教の力を思ひ起させられるのである。夫から又個人的及世界的經驗の深き眞理を吾々に示したる世界の大なる文學と、吾人の存在並に吾々が生長せる宇宙の事實及經過を知らしむる所の科學の事をも考へ、又各時代の個人を教育し且つ之を高尚にする事に貢獻したる繪畫、彫刻、音樂及建築界の名工達人達の創作をも思ひ起すのである。最後に又吾々が若し一々其の事蹟を記録するならば其の偉大なる方に驚かざるべき實業界の大なる貢獻をも思ひ起さざるを得ないのである。

吾々が「教育的價値」と呼ばんと欲する所の事を演繹するのは是等の手段からであつて、倫理學、宗教、文學、科學、美術及實業即ち之である。學校の教科は是等より順次に引き出さるのであつて自然次の

様な問題が起る。即ち「四歳乃至五歳の子供の教育に於ては是等の教育的價値を如何に使用し何を選択すべきか」。知的見界より生ずる形式的及論理的細目を製作するの誤に陥る事を避けんが爲に再び我教育問題に於ける第一の要素即ち幼兒に考を轉じなければならぬ。而して幼兒の小さき經驗と、大なる教育的價値との間に如何なる連絡關係をつける事が出来るかと思ふなければならぬ。デューイー博士は曰く「心理學的考察は看過せらるゝか乃至は除外されるかも知れぬが、而も全く忘れられてしまふ事は出来ぬ。偶々忘れられて居てもいつかは考の内に戻つて來るものである。吾々は何處かで何等か原動力に訴へて心と其の對象物との間に連絡を作らなければならぬものであつて、此の連絡の絆なしに成功するなど云ふ事は問題にならぬ事であるが、唯其の連絡は精神に關係して居る物質其自身から生じたものであるか、又は外部の原因から致されたものであるかは問題である。併しながら若しも教科の題材が子供の擴がつて行く意識の内に相當な位置を持つ様なものであり、又其の題材が子供自身の過去の行爲や思考や悶えから生じて更に一層大なる到達及感受性

に適用せらるゝものであるならば「興味」を喚起する爲に如何なる工夫や企てをも、頼みとするの要は無
い。心理學的考察を以てする時は、興味とは題材が
全意識生活の中におかれ、子供がそれに由つて人生
の價値に對する分前を得るものたる事を要するもの
で、外界から提供せられた物即ち子供には反對の動
機に發達し子供には縁の遠い立場や態度に於て胚胎
せられ生み出されたるものである時は興味は起らぬ
ものである。

教育的價値としての倫理學—子供の生活が倫理學
の教育的價値に接近する事は困難な事ではない。倫
理學は人の行爲や性格に關するものであるから、家
庭や幼稚園に於ける子供の日々の生活は即ち原始的
の習慣や種々なる行爲の具體的の例である。幼稚園
は勝れたる倫理的制度であつて、其の社會生活は正
しき行爲の發達や禮儀的習慣の養成に役に立つもの
である。保姆たるものはかゝる方面を看過する様で
は決して成功しない。幼稚園に於ける社會生活に
は、或は子供相互の親交や物品の受授等が實際に行
はれ、之等がやがて品性の善き特色に發達し、其の
行爲は悪い習慣と傾向とを自然に撲滅するものであ

る。故に保姆は子供の能力に應じて與へられたる奉
仕や自己否定の行爲と、幼兒生活の美しき發表に對
する眞の訓練となるべき毎日の禮儀、規律、時間、
清潔等の習慣とを培ひ以て子供が團體と接觸する際
に受ける所の自己訓練を補つて行くべきであつて、
しかもそれが如何にても偶然的發達に見える程自然
的、非感情的な方法でなければならぬ。

教育的價値としての宗教—子供は其の穢れざる狀
態に於て敬神の本能を持つて居る。人生生活の他の
場合に於ても繰返す如く、人類の初期に於ける根本
的傾向、即ち種族の宗教的生活を發達せしめたる衝
動を其の本能に於て繰返すのである。吾々は此敬神
本能を貫して教育的價値たる宗教に子供を導かねば
ならぬ。幼稚園に於ては特に宗教的訓練を細目の中
には入れないけれども、後日宗教的經驗となつて表
はれる所の衝動を培つて、將來の宗教的訓練の種子
を播く事は出来る。總ての宗教は感情に其の端緒を
持つて居るのであつて、知が宗教的經驗を支配して
居る様な時でも、眞の宗教的精神を支配して居る所
の信仰は多く感情の感化を受けて居るものである。
子供は由來感情に動かされるものであるから特に心

を刺戟する様な感化は受け易いものである。子供は又敬神の念に對して可能性を持つて居るものであつて、其の敬神の念は適當に培はるれば將來の宗教的體驗に役立つものである。

理想的條件を考へる事は吾々の熱心なる希望ではあるが、吾々は今幼稚園の實際問題に關して居る以上事實上の立場より考へなければならぬ。今日米國の多くの家庭に於ては高き神聖なる神に對する敬虔の態度竝に宗教的儀式の遵守に於て著しく缺けて居る所がある。一般に宗教的儀式の爲に別に取離されたるものと認められて居る日曜日如きも、子供の心には、遠足をする日であり、ゴルフをする日であり、自働車に乗る日であり、乃至は又新聞に大きな美しく色彩られた附録の現はれる日だと思つて居る。此の結果幼稚園に來て居る子供の一割乃至其上は、信仰上の普通の行爲の爲に其の子供の兩親なり他の親達と一緒に禮拜の場所に行く事に心を動かされもしなければ又威かされもしない。又其の小さい心は寢床の側に脆いて靜かに天の父に祈る母の様子にも刺戟せられないし、家族禮拜の爲に一緒に集る意味に就いて怪しむ事も無かつた。是等の子供等

は日曜學校に送る事も出来るのであるが、家庭に於ては宗教的教養に對する此の代用さへも屢々用ひられて居ない。故に吾々の取扱つて居る子供等の中には敬神本能の全く働かない子供が随分居る譯である。茲に於て子供の一般の傾向や本能に關する吾々の知識が其の用をなすのである。過去の歴史に鑑み、又吾々の經驗に徴して見るも、敬神本能は各個人の心の中~~に~~集るものなる事は明かである。之は全智全能の神に由りて平等に與へられたる賜であつて、此の故に吾々は吾々の見る事の出来ない事を信仰するのである。吾々は恰も小さい種子や球根を取扱ふが如くに小さい子供を取扱はねばならぬと信するのである。正しき條件を間違無く附與して、毎日毎日怠る事無く培つて見よ、必ず其の小さき芽生を見る事が出来る。吾々はフレーベルの深き眞理を含める次の教訓を自分のものとしなければならぬ。「子供の心の中に播かれたる眞理の種子は何時かは屹度發芽し結實するものである。たとひ其の發芽の過程は徐々であるにしても若し其の種子に生命さへあれば必ず結實すべき時が來るものである」。

故に宗教の教育的價値に接近する事は、子供の心

の中に敬神の念が發達する筈に養育して行く事に由つてゐる。此の養育は特殊の手段に由るよりも寧ろ一般的の感化に由る方法が效果のあるものである。大自然は小さい子供に目に見える象徴を以て話し、從て「大なる目に見えぬもの」(神)に對する朦朧ゴウラクした感じ即ち敬神の端緒となるべき畏敬及不審を起させる具體的の要素を提供するものである。田舎や小さい町にある幼稚園の保母は子供を自然界に連れ出す特權を與へられて居るから、自然界に於ける「生長」の不審、鳥の生活に關しては巢を造る事、雛を養ふ事、候鳥の渡等、又は當初は匍つて居る毛蟲が後變じて美しい蝶となる等の事は自然のままの状態に於て之を觀察させる事が出来るのである。大都會に於ける保母はせめて偶に園外に出るとしても公園に連れて行く位に過ぎないのであるから、子供を躑けるには此の價值ある手段を子供から取り去らぬ様に努めて幼稚園の中に自然界の多くの場合を持ち來す様にしなければならぬ。球根を植えて之を育てる事、花園を興へて之に種子を播き其の生長を眺める事等は子供等が自然の大なる世界との直接の接觸の缺乏を多量に補ふに足るものである。

毛蟲を幼稚園に持つて來て昆蟲飼育箱の中に入れて子供等自身自ら飼育して遂に其の繭を作るのを見る事は子供等の爲に價值ある新しき經驗を造るものである。自然界に於ける要素の種々なる表現、例へば雨、風、雪、太陽等に對する子供等の興味は、不審議と敬虔との精神を養ふべきも一つの入口である。是等の種々なる經驗が子供等に不審議の念を喚起する時、心ある保母は之を誘導して「全世界を愛しむ」大なる靈を子供の心に思ひ起させる機會を逸しないのである。

又歌や單純な祈を以て敬虔の念を醒めしめるべき表示を子供に與へる事も出来る。最も不幸な境遇に居た子供でも此方法を以て教養すれば幸福なる結果を致す事が出来る。私は或る組の子供等に行つた興味ある經驗を持つて居る。復活祭の頃の事であつた。子供等お互で手入した球根植物や其の他の春の花があつたので子供等にとつては復活祭の氣分は殊に楽しいものであつた。保母の机の上には一つの繭が置いてあつたが、子供等は絶えずこの繭に注意し、其の繭に指示せられて其の中に眠つて居る生命のある事を思ひ起すのであつた。子供等は全く無生の如き

繭の中に生命の或る標シムシを待ち兼ねて見守るのであつた。其の週は終り最後に其の組を分れさせやうとした瞬間に一人の子供は大嬉の調子で叫んだ「出て来る、出て来る！、蝶々が出て来る！」子供等は爪立てして箱の周圍に集つた。而して新しき生命が出て来て其の美しき翅を擴げるのを敬虔の沈黙を以て觀察して居た。遂に全く繭から出て、其の翅を乾し乍ら自分のふり捨てた家の上に靜かに立つセクロビアンモッス（一種の蛾）の其の美しさが出現された時、子供等の驚きと喜びの嘆息とで其の室はどよめいた事だつた。暫らくして、稍々臆病な飛び方で其の翅を試み、それから又暫らくして其の室の木の植えてある窓の方へ飛んで行つて。翌朝子供等が來た時には蛾は未だ其の植物の中に居た。子供等は暫らくの間其の美しい動物を觀察して喜んで居たが、度々窓の方へ飛ぶので、一人の子供は、多分外へ出たがつて居るのだらうとの暗示を得、遂に一般の同意に由りて窓は開けられた。蛾は美しき外部の世界へ飛び去つたのであつた。

友と歩ける人

母と歩ける人

子供と歩ける人

神と歩ける人

幸福の人。